

1) 渡航を決めた理由

もともとリーシュマニア症という海外で問題となっている人獣共通感染症の研究を行っているため外国の研究者との交流が多く、しかも派遣の前年は実際バングラデシュ等でリーシュマニア症患者を見る機会も有ったため感染症の征圧に向けたリスク分析や評価、或いは疫学調査というものに非常に興味がありました。また、派遣先では現在所属している研究室では出来ないベクターを使用した BSL2 実験が出来るため、この機会を通じてリスク分析・評価、疫学調査、さらにはベクターを使用した研究を学ぶことは有益だと考え渡航を決めました。

2) 現地の様子

エジンバラは世界遺産にも指定されているエジンバラ城を中心に未だ中世ヨーロッパを思わせる町並みの都市で、そこにあるエジンバラ大学も創立が 1582 年、チャールズ・ダーウィンやコナン・ドイルも学んだという素晴らしい歴史を持つ大学でした。私が行っていたのは市内のメインのキャンパスでは無くバスで 40 分ほどの郊外のイースターブッシュという場所でした。そこには羊が草を食んでいるのどかな風景があり、近くにはロスリン研究所やロスリン礼拝堂があります。キャンパスには動物病院と附属牧場、そして派遣先である感染症センターの熱帯獣医学研究所がありました。

3) 生活の様子

緯度が高いため派遣された 2 月はまだ日照時間が短く、さらに霧雨や雪の日が多いため良くも悪くもイギリスらしい気候を体験できました。朝はバスに乗り研究所へ行き午前は主にインセクトリウムで実験を行います。キャンパスへは自家用車で登校する大学院生も多くいました。昼食は牧場実習に來ている学部学生に混じりながらカフェテリアで摂り、午後にも実験を行ったりその他講習やミーティングに参加したりという生活です。夜は教室員とパブへ行くこともありました。皆お酒は好きなのですが大学内で飲酒するのはマナー違反だそうです。週末は史跡や博物館に足を運ぶことが多かったです。言葉に関しては英語なので私の発音が悪いのを除けば大きな問題はないのですが、スコットランド訛りのヒトには何度も聞き返さないと解らないこともありました。派遣中は教室の大学院生とルームシェアをしていましたが一週間ほどでその学生はウガンダに調査に行ってしまったため結果的にその後は一人暮らしとなりました。

4) 行った研究の概要

派遣先では始めに研究に必要な安全管理に関する講習を受け、その後はトリパノソーマ症の研究を行う傍ら研究室の人からリスク分析・管理に関する考え方、方法を聞いて勉強するというところを行っていました。また、研究室が主にアフリカにおけるトリパノソーマ症の疫学調査を行っているということもあり、現地での調査に関してディスカッションを行う機会がよくありました。トリパノソーマ原虫の研究に関しては、抗酸化物質がトリパノソーマ原虫のツェツェバエに対する感染性に与える影響を調べるということで、実験は主にインセクトリウムでの感染実験でした。実験はツェツェバエの飼育を学ぶ所から始めたので毎週ツェツェバエの餌に使う血液を得る為羊を屠るのに立ち会うということもありました。その他には派遣先の研究室以外の感染症センターの研究者に面会してバベシア症や HIV 等の研究について話を聞く機会もありました。

5) 行って良かった点と反省

今回の派遣は一か月という短期間でしたが、感染症の基礎研究からフィールドでの疫学研究、リスク分析・管理法といった分野まで幅広い研修・研究を行うことができ非常に充実した時間を過ごすことができました。また、他国の大学に滞在し実験することで日本以外の研究室、大学を知ることができ、日本とは違った大学の安全管理システムや福利厚生、充実した動物病院や大動物病棟を見聞きすることができ大変興味深かったです。一方、派遣された感染症センターには医学・獣医学部の多くの研究者がいますが今回は主に受け入れ教員の下で研修を行うことを前提に考えていたため、派遣されてからもっと多くの研究者に面会し話をする機会を作っておけば良かったと感じました。また、もしセンターの BSL3 内部の見学或いは実験を希望するのならかなり事前から調整する必要があるかもしれません。



写真 1 : エジンバラ市街地の風景。中心奥に見えるのがエジンバラ城



写真 2 : 熱帯獣医学研究所近景。周りは附属牧場でヒツジやウマが草を食んでいる